

日蓮大聖人御書全集

ほけきょうだいもくしよ

法華経題目抄

みよ　　さんぎ　　こと

(妙の三義の事)

新版 531
〜
543

ほけきようだいもくしよう みよう さんぎ こと

法華経題目抄（妙の三義の事）

ぶんえい ねん がつ にち さい

文永3年（'66）1月6日 45歳

こんぼんだいしもんじんにちれんせん

根本大師門人日蓮撰す。

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経

と い ほけきよう こころ 知

問うて云わく、法華経の意をもしらず、ただ

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経とばかり、五字七字に限って一日に一遍、

ひとつきないしいちねん じゅうねん いちごしよう あいだ いっぺん とな

一月乃至一年・十年・一期生の間にただ一遍など唱え

きようじゆう あく ひ しあくしゆ 赴

ても、軽重の悪に引かれずして四悪趣におもむかず、つ

ふたい くらゐ 至

いに不退の位にいたるべしや。

こた 答えて云わく、しかるべきなり。

と い ひ ひ 言 言 手にとらざればや 焼

みず みず 言 口 飲 欲 けず、「水、水」といえども、口にのまざれば水のほしさも

止 なんみようほうれんげきよう だいもく と な ぎしゆ やまず。ただ南無妙法蓮華経と題目ばかりを唱うとも、義趣

覚 あくしゆ 免 をさとらさば、悪趣をまぬかれんこと、いがあるべかる

らん。

こた い しし すじ こと げん いちどそう よ 答えて云わく、師子の筋を琴の絃として一度奏すれば余

げん 切 うめのみ 酸 こえ 聞 くち 唾溜 の絃ことごとくききれ、梅子のすき声をきけば口につたまり

潤 せけん ふしぎ うるおう。世間の不思議すら、かくのごとし。いわんや、

ほけきよう ふしぎ しょうじよう したい な

轉

法華經の不思議をや。小乗の四諦の名ばかりをさやずる

おうむ てん しょう さんき たも ひと たいぎよ なん

鸚鵡、なお天に生ず。三帰ばかりを持つ人、大魚の難を

免

まぬかる。いかにいわんや、法華經の題目は八万聖教の

かんじん いっさいしよぶつ がんもく 汝 等 唱 しあくしゆ

肝心、一切諸仏の眼目なり。なんじ、これをとなえて四惡趣

離

うたが

をはなるべからずと疑うか。

しょうじきしやほうべん ほけきよう しん い え

正直捨方便の法華經には「信をもつて入ることを得たり」

い そうりんさいご ねはんぎよう ぼだい いん ぶりよう

と云い、双林最後の涅槃經には「この菩提の因はまた無量な

しんじん と すなわ おさ つ

りといえども、もし信心を説かば、則ちすでに撰め尽くす」

とううんぬん

等云々。

そ ぶつどう い こんぽん しん もと ごじゅうにい なか
夫れ、仏道に入る根本は信をもつて本とす。五十二位の中

じっしん もと じっしん くらゐ しんじんはじ
には十信を本とす。十信の位には信心初めなり。たとい

解 しんじん もの どんこん しょうけん もの
さとりなけれども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。

解 しんじん もの ひぼう せんだい もの
たといさとりあれども信心なき者は、誹謗・闡提の者なり。

ぜんしょうびく にひやくごじっかい たも しぜんじよう え じゅうにぶきよう
善星比丘は二百五十戒を持ち、四禅定を得、十二部経を

そら もの だいばだつた ろくまん はちまん ほうぞう 覚 じゅうはつぺん
諳にせし者。提婆達多は六万・八万の宝蔵をおぼえ、十八變

げん うげむしん もの いま あびだいじよう
を現ぜしかども、これらは有解無信の者。今に阿鼻大城に

き かしよう しやりほつとう むげうしん もの ほとけ じゆ
ありと聞く。迦葉・舍利弗等は無解有信の者なり。仏に授

き こうむ けこうによらい こうみようによらい ほとけと
記を蒙つて、華光如来・光明如来といわれき。仏説いて

のたま うたが しょう しん すなわ まさ あくどう お

云わく「疑いを生じて信ぜずんば、即ち当に悪道に墮つ

とううんぬん

うげむしん もの と たも

べし」等云々。これらは有解無信の者を説き給う。

いま よ せけん がくしや い しんじん

しかるに、今の代に世間の学者の云わく「ただ信心ばか

げ こころ なんみようほうれんげきよう とな

りにて解する心なく、南無妙法蓮華経と唱うるばかりにて、

あくしゆ 免 とううんぬん ひとびと

いかでか悪趣をまぬかるべき」等云々。この人々は、経文

あびだいじよう 免

のごとくならば、阿鼻大城まぬかれがたし。

さと なんみようほうれんげきよう とな

されば、させる解りなくとも、南無妙法蓮華経と唱うる

あくどう 免 たと れんげ ひ したが めぐ

ならば、悪道をまぬかるべし。譬えば蓮華は日に随って回

はちす こころ ばししよう いかずち ぞうちよう くさ

る。蓮に心なし。芭蕉は雷によりて増長す。この草に

みみ われ れんげ ばしよう ほけきよう だいもく にちりん

耳なし。我らは蓮華と芭蕉とのごとく、法華経の題目は日輪

いかずち さい いきつの み たい みず い

と雷とのごとし。犀の生角を身に帯して水に入りぬれば、

みずごしやく み ちか せんだん いちようひら しじゆうゆじゆん

水五尺、身に近づかず。梅檀の一葉開きぬれば、四十由旬の

いらん へん われ あくごう いらん みず ほけきよう

伊蘭を変ず。我らが悪業は伊蘭と水とのごとく、法華経の

だいもく さい いきつの せんだん いちよう こんごう けんご

題目は犀の生角と梅檀の一葉とのごとし。金剛は堅固にし

いっさい もの やぶ ひつじ つの かめ こう やぶ

て一切の物に破られず。されども羊の角と亀の甲に破らる。

にくるじゆ おおとり えだ折 蚊 睫 巢

尼俱類樹は大鳥にも枝おれざれども、かのまつげにすくう

鶇 鶇 ちよう えだ われ あくごう こんごう

しようりよう鳥に枝おれぬ。我らが悪業は金剛のごとし、

にくるじゆ ほけきよう だいもく ひつじ つの

尼俱類樹のごとし。法華経の題目は羊の角のごとく、しよ

ちよう

こはく

ちり

取

じしやく

くろがね

吸

うりよう鳥のごとし。琥珀は塵をとり、磁石は鉄をすう。

われ

あくごう

ちり

くろがね

ほけきよう

だいまく

こはく

我らが悪業は塵と鉄のごとく、法華経の題目は琥珀と

じしやく

思

つね

なんみようほうれんげきよう

とな

磁石のごとし。かくおもいて、常に南無妙法蓮華経と唱え

たも

させ給うべし。

ほけきよう

だいいち

かん

い

むりようむしゆこう

ほう

き

法華経の第一の巻に云わく「無量無数劫にも、この法を聞

かた

だいが

かん

い

ほけきよう

むりよう

くこともまた難し」。第五の巻に云わく「この法華経は無量

くに

なか

ないしみようじ

き

う

とう

の国の中において、乃至名字をも聞くことを得べからず」等

うんぬん

ほけきよう

みな

聞

有

難

云々。法華経の御名をきくことは、おぼろけにもありがたき

しゆせんたぶつ

たほうぶつ

よ

出

たま

ことなり。されば、須仙多仏・多宝仏は、世にいでさせ給い

たりしかども、法華經の御名をだにもとき給わず。釈迦如来

ほけきよう

よ

出

たま

しやかによらい

は、法華經のために世にいでさせ給いたりしかども、

しじゆうにねん

あいだ

な

秘

語

出

四十二年が間は名をひしてかたりいださざりしかども、

ほとけ

おんとししちじゆうに

もう

とき

みようほうれんげきよう

唱

仏の御年七十二と申せし時、はじめて妙法蓮華經とな

出

たま

まかしな

にほん

えいださせ給いたりき。しかりといえども、摩訶尸那・日本

とう

へんごく

もの

みな

聞

いつせんいちじゆうよねん

等の辺国の者は御名をもきかざりき。一千一十余年すぎて

さんびやくごじゆうよねん

およ

みな

き

三百五十余年に及びてこそ、わずかに御名ばかりをば聞き

たりしか。

されば、この經に値いたてまつることをば、三千年に

きよう

あ

さんぜんねん

いちどはな咲 うどんげ むりようむへんこう いちどあ いちげん かめ

一度花さく優曇華、無量無辺劫に一度値うなる一眼の亀に

譬

だいち うえ はり た だいぼんてんのうぐう

もたとえたり。大地の上に針を立てて、大梵天王宮より芥子

投

はり 先 けし 貫

をなぐるに、針のさきに芥子のつらぬかれたるよりも、

ほけきよう

だいもく あ

難

しゅみせん はり た

法華經の題目に値うことはかたし。この須弥山に針を立て

しゅみせん

おおかせ

強

ふ

ひ

糸

渡

て、かの須弥山より大風つよく吹く日いとをわたさんに、

至

針

あな

糸

先

入

いたりてはりの穴にいとさきのいりたらんよりも、

ほけきよう

だいもく あ

たてまつ

難

きよう

法華經の題目に値い奉ることかたし。されば、この經の

だいもく

唱

たま

思

しやうもう

はじ

題目をとなえさせ給わんには、おぼしめすべし、生盲の始

まなこ開

ふぼとう

見

嬉

つよ

敵

めて眼あきて父母等をみんなよりもうれしく、強きかたきに

捕

もの

許

さいし

み

珍

とられたる者の、ゆるされて妻子を見るよりもめずらしと

思

おぼすべし。

と

い

だいもく

とな

しょうもん

問うて云わく、題目ばかりを唱うる証文これありや。

こた

い

みようほけきよう

だいはち

い

ほつけ

みな

じゆじ

答えて云わく、妙法華經の第八に云わく「法華の名を受持

もの

ふく

はか

しょうほけきよう

い

せん者、福は量るべからず」。正法華經に云わく「もしこの

きよう

き

みようごう

せんじ

とく

はか

てんぽん

經を聞いて、名号を宣持せば、徳は量るべからず」。添品

ほけきよう

い

ほつけ

みな

じゆじ

もの

ふく

はか

法華經に云わく「法華の名を受持せん者、福は量るべから

とううんぬん

もん

だいもく

とな

ふく

はか

ず」等云々。これらの文は、題目ばかりを唱うる福、計る

見

いちぶはちかんにじゆうはつぽん

じゆじ

どくじゆ

べからずとみえぬ。一部八卷二十八品を受持・読誦し、

ずいき ごととら

こう

ほうべんぼん

じゆりようほんとう

じゆじ

随喜・護持等するは広なり。方便品・寿量品等を受持し、

ないしごじ

りやく

いちしくげ

ないしだいもく

乃至護持するは略なり。ただ一四句偈、乃至題目ばかりを

とな

唱

もの

ごじ

よう

こう

りやく

よう

なか

唱え、となうる者を護持するは要なり。広・略・要の中に

だいもく

よう

うち

は題目は要の内なり。

と い

みようほうれんげきよう

ごじ

幾

くどく

問うて云わく、妙法蓮華経の五字には、いくばくの功德

納

をかおさめたるや。

こた

い

たいかい

しゆる

おさ

だいち

うじよう

ひじよう

答えて云わく、大海は衆流を納めたり。大地は有情・非情

たも

によいほうしゆ

まんざい

ふ

ほんのう

さんがい

りよう

を持てり。如意宝珠は万財を雨らし、梵王は三界を領す。

みようほうれんげきよう

ごじ

いっさい

くかい

しゆじよう

妙法蓮華経の五字、またかくのごとし。一切の九界の衆生

ならびに仏界を納む。十界を納むれば、また十界の依報の

国土を収む。

まず、妙法蓮華經の五字に一切の法を納むることをい

ば、經の一字は諸經の中の王なり。一切の群經を納む。

仏世に出でさせ給いて、五十余年の間、八万聖教を説き

おかせ給いき。仏は人壽百歳の時壬申歳、二月十五日

の夜半に御入滅あり。その後、四月八日より七月十五日に至

るまで一夏九旬の間、一千人の阿羅漢、結集堂にあつま

りて一切經をかきおかせ給いき。その後、正法一千年の

あいだ ごてんじく いっさいきよう 広 たま しんたんこく

間は、五天竺に一切経ひろまらせ給いしかども、震旦国に

わた ぞうほう い いちじゅうごねん もう ごかん こうめい

は渡らず。像法に入つて一十五年と申せしに、後漢の孝明

こうてい えいへいじゅうねんひのとうのとし ぶつきようはじ わた とう げんそう

皇帝・永平十年丁卯歳、仏経始めて渡つて唐の玄宗

こうてい かいげんじゅうはちねんかのえうまのとし いた わた やくしゃ

皇帝・開元十八年庚午歳に至るまで、渡れる訳者

いっぴやくしちじゅうろくにん も きた きよう りつ ろん いっせんしちじゅうろくぶ

一百七十六人、持ち来る経・律・論一千七十六部

ごせんしじゅうはちかんしひやくはちじゅうちつ みな ほけきよう きよう いちじ

五千四十八卷四百八十帙。これ皆、法華経の経の一字の

けんぞく しゆたら

眷属の修多羅なり。

みようほうれんげきよう い ぜんしじゅうよねん あいだ きよう なか

まず、妙法蓮華経の以前四十余年の間の経の中に、

だいほうこうぶつけこんぎよう もう きよう りゆうぐうじよう さんぼん

大方広仏華嚴経と申す経まします。竜宮城には三本あり。

じようぼん　じゆうさんせかいみじんじゆ　ほん　ちゆうぼん　しじゆうくまんはっせんはつぴやくげ

上本は十三世界微塵数の品。中本は四十九万八千八百偈。

げほん　じゆうまんげしじゆうはつぼん　さんぼん　ほか　しんたん　にほん

下本は十万偈四十八品。この三本の外に震旦・日本にはわ

はちじつかん　ろくじつかんとう　あごん　しやうじやうきやう　ほうどう　ほんにや

ずかに八十卷・六十卷等あり。阿含の小乗経、方等・般若

しよだいじようきやうとう　だいにちきやう　ぼんぼん　あばらかきや　ごじ

の諸大乘経等、大日経は、梵本には阿嚩囉訶佉の五字ば

さんぜんごひやく　げ　結　よ　しよそん

かりを三千五百の偈をもつてむすべり。いわんや、余の諸尊

しゆじ　そんぎやう　さんまや　かず　知　かんど

の種子・尊形・三摩耶、その数をしらず。しかるに、漢土に

ろつかん　しちかん　ねはんぎやう　そうりんさいご　せつ

はただわずかに六卷・七卷なり。涅槃経は双林最後の説、

かんど　しじつかん　ぼんぼん　おお　しよきやう

漢土にはただ四十卷、これも梵本これ多し。これらの諸経

みな　しやかによらい　と　ほけきやう　けんぞく　しゆたら

は皆、釈迦如来の説くところの法華経の眷属の修多羅なり。

この外、過去の七仏・千仏、遠々劫の諸仏の所説、現在十方

の諸仏の説経、皆、法華経の経の一字の眷属なり。

されば、薬王品に、仏、宿王華菩薩に対して云わく「譬

えば、一切の川流江河の諸水の中に海はこれ第一、衆山の中

に須弥山はこれ第一、衆の星の中に月天子は最もこれ

第一なるがごとし」等云々。妙楽大師、釈して云わく「已

今当の説に最もこれ第一なり」等云々。この経の一字の中

に十方法界の一切経を納めたり。譬えば、如意宝珠の一切

の財を納め、虚空の万象を含めるがごとし。経の一字は

いちだい すぐ ゆえ みようほうれんげ しじ はちまんほうぞう ちようか
一代に勝る故に、妙法蓮華の四字もまた八万法蔵に超過す
るなり。

みよう ほけきよう い ほうべん もん ひら しんじつ そう
妙とは、法華經に云わく「方便の門を開いて、眞実の相
しめ しょうあんだいし しゃく い ひみつ おうぞう ひら
を示す」。章安大師、釈して云わく「秘密の奥蔵を発く。

しょう みよう みようらくだいし もん う い
これを称して妙となす」。妙楽大師、この文を受けて云わ
く「発とは開なり」等云々。妙と申すことは、開というこ
となり。

せけん

たから

つ

くら

かぎ

ひら

難

世間に、財を積める蔵に鑰なければ、開くことかたし。

ひら

くら

うち

たから

み

けごんきよう

ほとけと

たま

開かざれば、蔵の内の財を見ず。華嚴經は、仏説き給い

たりしかども、きよう経を開く鑰をば、ほとけ仏彼の経に説き給わず。

あごん阿含・ほうどう方等・ほんにや般若・かんぎようとう觀経等の四十余年の経々も、ほとけ仏説き

たま給いたりしかども、か彼の経々の意をば開き給わず。もん門を

たま閉じておかせ給いたりしかば、ひと人、彼の経々をさとする者

いちにん一人もなかりき。たといさとれりとおもいしも、びやつけん僻見にて

ありしなり。しかるに、ほとけ仏、ほけきよう法華経を説かせ給いて、しよきよう諸経

の蔵を開かせ給いき。この時に四十余年の九界の衆生、はじめ始

めて諸経の蔵の内の財をば見したりしなり。

譬えば、たいち大地の上に人畜・草木等あれども、にちがつ日月の光な

たた

くらくら

くらくら

くらくら

くらくら

くらくら

くらくら

くらくら

まなこ ひと にんちく そうもく ひと 形 知 にちがつ

ければ、眼ある人も人畜・草木の色かたちを知らず、日月

出 たま はじ 知 そうち にぜん

いで給いてこそ、始めてこれをばしることは候え。爾前

しよきよう じようや 闇 ほけきよう ほんじやくにもん にちがつ

の諸経は長夜のやみのごとし。法華経の本迹二門は日月

もろもろ ぼさつ ふため にじよう びようもく

のごとし。諸の菩薩の二目ある、二乗の眇目なる、凡夫

もうもく せんだい しようもう とも にぜん きようぎよう

の盲目なる、闡提の生盲なる、共に爾前の経々にては

色 形 弁 ほけきよう とき

いろかたちをばわきまえずありしほどに、法華経の時、

しやくもん げつりんはじ い たま とき ぼさつ りようげんさき 覚

迹門の月輪始めて出で給いし時、菩薩の両眼先にさとり、

にじよう びようもくつぎ ほんぶ もうもくつぎ ひら しようもう

二乗の眇目次にさとり、凡夫の盲目次に開き、生盲の

いっせんだい みらい まなこ ひら えん むす みよう

一闡提、未来に眼の開くべき縁を結ぶ。これひとえに妙の

いちじ とい

一字の徳なり。

しやくもんじゆうしほん

いちみよう

ほんもんじゆうしほん

いちみよう

あ

にみよう

迹門十四品の一妙、本門十四品の一妙、合わせて二妙。

しやくもん

じゆうみよう

ほんもん

じゆうみよう

あ

にじゆうみよう

しやくもん

迹門の十妙、本門の十妙、合わせて二十妙。迹門の

さんじゆうみよう

ほんもん

さんじゆうみよう

あ

ろくじゆうみよう

しやくもん

しじゆう

三十妙、本門の三十妙、合わせて六十妙。迹門の四十

みよう

ほんもん

しじゆうみよう

かんじん

しじゆうみよう

あ

ひやくにじゆうじゆう

妙、本門の四十妙、觀心の四十妙、合わせて百二十重

みよう

ろくまんきゆうせんさんびやくはちじゆうしじ

いちいち

じ

した

ひと

の妙なり。六万九千三百八十四字、一々の字の下に一つ

みよう

そう

ろくまんきゆうせんさんびやくはちじゆうし

みよう

みよう

の妙あり。総じて六万九千三百八十四の妙あり。妙と

てんじく

さ

い

かんど

みよう

い

は、天竺には薩と云い、漢土には妙と云う。

みよう

ぐ

ぎ

ぐ

えんまん

ぎ

ほけきよう

いちいち

妙とは具の義なり。具とは円満の義なり。法華經の一々

もんじ いちじ いちじ よ ろくまんくせんさんびやくはちじゅうしじ おさ
の文字、一字一字に余の六万九千三百八十四字を納めたり。
たと たいかい いったい みず いったい かわ みず おさ ひと によい
譬えば、大海の一滌の水に一切の河の水を納め、一つの如意
ほうしゆ けし いったい によいほうしゆ たから ふ
宝珠の芥子ばかりなるが一切の如意宝珠の財を雨らす
ごとし。

たと あきふゆか そうもく はるなつ ひ あ えだは
譬えば、秋冬枯れたる草木の、春夏の日に値つて、枝葉・

はなみしゆつたい

にぜん あきふゆ そうもく

華菓出来するがごとし。爾前の秋冬の草木のごとくなる

くかい しゆじよう ほけきよう みよう いちじ はるなつ にちりん 値

九界の衆生、法華経の妙の一字の春夏の日輪にあいたて

ぼだいしん はな咲 じようぶつ おうじよう み生

まつりて、菩提心の華さき、成仏・往生の菓なる。竜樹

ぼさつ だいろん い たと だいやくし よ どく くり

菩薩、大論に云わく「譬えば、大薬師の能く毒をもつて菓

となすがごとし」云々。この文は、大論に法華経の妙の徳

しやく

もん

みょうらくだいし

しやく

い

じ

がた

を釈する文なり。妙楽大師、釈して云わく「治し難きを

よ じ

みょう

しよう

とううんぬん

そう

じょうぶつ

おうじょう

能く治す。ゆえに妙と称す」等云々。総じて成仏・往生

ものしにん

だいいち

けつじょうしよう

にじょう

だいに

のなりがたき者四人あり。第一には決定性の二乗、第二に

いっせんだいにん

だいさん

くうしん

もの

だいいし

ほうぼう

もの

は一闡提人、第三には空心の者、第四には謗法の者なり。

ほけきよう

ほとけ

たも

ゆえ

ほけきよう

これらを法華経において仏になさせ給う故に、法華経を

みょう

い

妙とは云うなり。

だいはだつた

こくぼんおう

だいいち

たいし

じょうぼんおう

甥

あなん

提婆達多は、斛飯王の第一の太子、浄飯王にはおい、阿難

そんじや

兄

きょうしゆしやくそん

従

兄弟

なんえんぶだい

軽

尊者がこのかみ、教主釈尊にはいとこ、南閻浮提にかるか

ひと

しゅだびく

しゅつけ

あなんそんじゃ

らざる人なり。須陀比丘を師として出家し、阿難尊者に

じゅうはつぺん

習

げどう

ろくまんぞう

ほとけ

はちまんぞう

むね

浮

十八変をならい、外道の六万蔵、仏の八万蔵を胸にうか

ごほう ぎよう

ほとけ

たつと

気色

べ、五法を行じて、ほとんど仏よりも尊きけしきなり。

りようとう

た

はそうさい

おか

ぞうぜん

かいだん

きづ

両頭を立てて破僧罪を犯さんために、象頭山に戒壇を築き、

ぶつでし

まね

取

あじやせたいし

語

い

われ

仏弟子を招きとり、阿闍世太子をかたらいて云わく「我は

ほとけ

ころ

しんぶつ

たいし

ちち

おう

ころ

しんおう

仏を殺して新仏となるべし。太子は父の王を殺して新王と

たま

あじやせたいし

ちち

おう

ころ

だいば

なり給え」。阿闍世太子、すでに父の王を殺せしかば、提婆

だった

ほとけ

窺

たいせき

ほとけ

おんみ

ち

達多はまた仏をうかがい、大石をもちて仏の御身より血

出

あらかん

けしきびくに

う

殺

ごぎやく

うち

をいだし、阿羅漢たる華色比丘尼を打ちころし、五逆の内

たる三逆をつぶさにつくる。その上、瞿伽利尊者を弟子と

あじやせおう

だんな

頼

ごてんじく

じゆうろく

たいこく

ごひやく

し、阿闍世王を檀那とたのみ、五天竺・十六の大国・五百

ちゆうこくとう

いちぎやく

にぎやく

さんぎやくとう

もの

みな

だいば

の中国等の一逆・二逆・三逆等をつくれる者、皆、提婆

いちるい

譬

たいかい

しよが

が一類にあらざることこれなし。たとえば、大海の諸河を

集

たいざん

そうもく

ちえ

もの

あつめ、大山の草木をあつめたるがごとし。智慧の者は

しやりほつ

じんずう

もの

もくれん

従

あくにん

だいば

舍利弗にあつまり、神通の者は目連にしたがい、悪人は提婆

語

にかたらいしなり。

あつ

じゆうろくまんはつせんゆじゆん

した

こんごう

ふうりん

されば、厚さ十六万八千由旬、その下に金剛の風輪ある

だいち

破

しyoujin

むけんだいじyou

お

だいいち

大地すでにわれて、生身に無間大城に墮ちにき。第一の

でし くぎやり しょうじん じごく い せんしゃばらもんによ

弟子・瞿伽梨も、また生身に地獄に入る。旃遮婆羅門女も

墮 はるりおう ぜんしょうびく 墮

おちにき。波瑠璃王もおちぬ。善星比丘もおちぬ。またこ

ひとびと しょうじん お ごてんじく じゅうろく たいこく

これらの人々の生身に墮ちしをば、五天竺・十六の大国・

ごひやく ちゅうこく じゅうせん しょうこく ひとびと みな 見 ろくよく

五百の中国・十千の小国の人々も、皆これをみる。六欲・

しぜん しき むしき ほんのう たいしゃく だいろくてん まおう えんまほうおうとう

四禅・色・無色・梵王・帝釈・第六天の魔王も、閻魔法王等

みな ごらん さんぜんだいせんせかい じつほうほうかい しゅじょう

も、皆、御覧ありき。三千大千世界・十方法界の衆生も、

みな き

皆、聞きしなり。

だいちみじんごう 過 むけんたいじょう い

されば、大地微塵劫はすぐとも、無間大城を出ずべから

こうしゃく 磷 あ びだいじょう く 尽 おも

ず。劫石はひすらぐとも、阿鼻大城の苦はつきじところそ思

あ ほかきよう だいばほん きようしゆしやくそん むかし

い合いたりしに、法華経の提婆品にして、教主釈尊の昔

し てんのうによらい き たも ふしぎ 覚 にぜん

の師・天王如来と記し給うことこそ不思議におぼゆれ。爾前

きようぎようじつ ほけきよう だいもうご ほけきようじつ にぜん

の経々実ならば法華経は大妄語、法華経実ならば爾前の

しよきよう だいこおうざい だいば さんぎやく おか

諸経は大虚誑罪なり。提婆が二逆をつぶさに犯してその

ほかむりよう じゆうざい つく てんのうによらい にぎやく

外無量の重罪を作りし、天王如来となる。いわんや、二逆・

いちぎやくとう もろもろ あくにん とくどううたが たと だいち

一逆等の諸の悪人の得道疑いなきこと、譬えば、大地を

返 そうもくとう けんせき 破 ものなんそう

かえずに草木等のかえるがごとく、堅石をわる者軟草をわ

ゆえ きよう みよう い

るがごとし。故に、この経をば妙と云う。

によにん ないげてん 謗 さんこうごてい さんぶんごてん

女人をば内外典にこれをそしり、三皇五帝の三墳五典に

てんごく

もの さだ

わざわ

さんによ

お

い

諂曲の者と定む。されば、「災いは三女より起こる」と云え

くに

ほろ ひと そんな

みなもと

によにん

もと

ないてん

なか

り。国の亡び人の損ずる源は、女人を本とす。内典の中に

しよじょうどう

だいほう

けこんぎよう

によにん

じごく

つか

は、初成道の大法たる華嚴経には「女人は地獄の使いなり。

よ

ほとけ

しゆし

た

げめん

ぼさつ

に

ないしん

やしや

能く仏の種子を断つ。外面は菩薩に似て、内心は夜叉のご

い

そうりんさいご

だいねはんぎよう

いっさい

こうがかなら

とし」と云い、双林最後の大涅槃経には「一切の江河必ず

えこくあ

いっさい

によにんかなら

てんごくあ

い

回曲有り。一切の女人必ず諂曲有り」と。また云わく「あ

さんぜんかい

なんし

もろもろ

ぼんのう

あ

あつ

いちにん

らゆる三千界の男子の諸の煩惱を合わせ集めて、一人の

によにん

ぎょうしよう

とううんぬん

女人の業障となす」等云々。

だいけこんぎよう

もん

よ

ほとけ

しゆし

た

と

そうろう

大華嚴経の文に「能く仏の種子を断つ」と説かれて候

によにん

ほとけ

成

しゆし

焦

たと

だいかんばつ

は、女人は仏になるべき種子をいれり。譬えば、大旱魃の

とき

こくう

なか

だいうん 起

おおあめ

だいち

ふ

枯

時、虚空の中に大雲おこり大雨を大地に下らすに、かれた

むりようむへん

そうもく

はな咲

み生

るがごとくなる無量無辺の草木、花さき菓なる。しかりと

焦

たね

生

けつく

あめ

繁

朽

いえども、いれる種はおいずして、結句、雨しげければくち

失

ほとけ

だいうん

せつきよう

おおあめ

うするがごとし。仏は大雲のごとく、説教は大雨のごと

枯

そうもく

いっさいしゆじよう

たと

く、かれたるがごとくなる草木を一切衆生に譬えたり。

ぶつきよう

あめ

うるお

ごかい

じゆうぜん

ぜんじようとう

くどく

しゆ

仏教の雨に潤い、五戒・十善・禅定等の功德を修する

はな咲

み生

あめ

焦

たね

生

は、花さき菓なるがごとし。雨ふれどもいりたる種のおい

朽

失

によにん

ぶつきよう

ししようじ

ず、かえりてくちうするは、女人の仏教にあいて生死を

離

はなれずして、かえりて仏法を失い、悪道に墮つるに譬うたど

べし。これを「能く仏の種子を断つ」とは申すなり。も

ねはんぎようもん いっさい こうが 曲 によにん

涅槃経の文に「一切の江河のまがれるがごとく、女人も

またまがれり」と説かれたるは、水はやわらかなる物なれ

いしやま 強 もの 障 みず 先 怯

ば、石山なんどのこわき物にさえられて水のさきひるむゆ

えに、あれへこれへ行くなり。女人もまたかくのごとし。

によにん こころ みず たど こころ 弱 みず

女人の心をば水に譬えたり。心よわくして水のごとくな

どうり おも おとこ こころ あ

り。道理と思うことも、男のこわき心に値いぬれば、せ

かれてよしなき方へおもむく。また、水にえがくとどま

ほう みず

によにん ふしん たい

ただいま

らざるがごとし。女人は不信を体とするゆえに、只今さあ

み

様

るべしと見ることも、またしばらくあれば、あらぬさまに

ほとけ

もう

しょうじき

もと

ゆえ

曲

によにん

なるなり。仏と申すは正直を本とす。故に、まがれる女人

ほとけ

成

ごしょうさんじゅう

もう

いつ

障

は仏になるべからず。五障三従と申して、五つのさわり、

みつ

従

こと

ごんじきによきよう

さんぜ

しよぶつ

三つしたがる事あり。されば銀色女経には「三世の諸仏の

まなこ

だいち

お

によにん

ほとけ

と

眼は大地に落つとも、女人は仏になるべからず」と説か

だいろん

せいふう

取

によにん

こと

れ、大論には「清風はとるといえども、女人の心はとりが

い

たし」と云えり。

しよきよう

きり

によにん

もんじゆしりぼさつ

かくのごとく諸経に嫌われたりし女人を、文殊師利菩薩

みょう いちじ と たま

ほとけ 成

の妙の一字を説き給いしかば、たちまちに仏になりき。

ふしん

ゆえ

ほうじょうせかい

たほうぶつ

だいいち

あまりに不審なりし故に、宝浄世界の多宝仏の第一の

でし ちしやくぼさつ しやかによらい みでし ちえだいいち しやりほつそんじや

弟子・智積菩薩、釈迦如来の御弟子の智慧第一の舍利弗尊者、

しじゆうよねん だいしようじようきよう きようもん

りゆうによ

ほとけ

四十余年の大小乗経の経文をもつて竜女の仏になる

よし なん

ついで

かな

ほとけ

まじき由を難ぜしかども、終に叶わず仏になりき。

しよじようどう

よ

ほとけ

しゆし

た

そうりんさいご

いっさい

こう

初成道の「能く仏の種子を断つ」、双林最後の「一切の江

がかなら えこくあ

もん

やぶ

こんじきによきよう

だいろん

河必ず回曲有り」の文も破れぬ。銀色女経ならびに大論の

ききよう

むな

ちしやく

しやりほつ

した

ま

くち

と

亀鏡も空しくなりぬ。智積・舍利弗は舌を巻いて口を閉じ、

にんてんだいえ

かんき

たなごころ

あ

人天大会は歡喜せしあまりに 掌 を合わせたりき。これひ

とえに妙の一字の徳なり。

みよう いちじ とく

この南閻浮提の内に二千五百の河あり。一々に皆まがれ

なんえんぶだい うち にせんごひやく かわ いちいち みな曲

り。南閻浮提の女人の心のまがれるがごとし。ただし

なんえんぶだい によん ころ 曲

娑婆耶と申す河あり。繩を引きはえたるがごとくして、直ち

しやばや もう かわ なわ ひ 延 ただ

に西海に入る。法華経を信ずる女人、またまたかくのごと

さいかい い ほけきよう しん によん

く、直ちに西方浄土へ入るべし。これ妙の一字の徳なり。

ただ さいほうじようど い みよう いちじ とく

妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すは、よみがえる義なり。

みよう そせい ぎ そせい もう 蘇 ぎ

譬えば、黄鵠の子死せるに、鶴の母「子安」となけば、死せ

たと こうこく こし つる はは しあん 鳴 し

る子還つて活り、鳩鳥水に入れば、魚蚌ことごとく死す。

こかえ よみがえ ちんちようみず い ぎよぼう 悉 し

に大だいの字じのみありて妙みょうの字じなし。ただ生いける者ものを治じして死しせる者ものをば治じせず。法華經ほけきょうは死しせる者ものをも治じするが故ゆえに妙みょうと云いう釈しゃくなり。

されば、諸經しよきょうにしては、仏ほとけになる者ものも仏ほとけになるべから

ず。その故ゆえは、法華ほっけは仏ほとけになりがたき者ものすらなお仏ほとけにな

りぬ。なりやすき者ものは云いうにや及およぶという道理どうり立ちぬれば、

法華經ほけきょうをとかれて後のちは、諸經しよきょうにおもむく人ひと一人いちにんもあるべか

らず。しかるに、正像しやうぞう二千年にせんねん過ぎて末法まつぽうに入いつて、当世とうせいの

衆生しゆじやうの成仏じやうぶつ・往生おうじやうのとげがたきこととは、在世ざいせの二乘にじやう・闡提せんだい

とう ひやくせんまんおくばい過 しゆじよう かんぎようとう しじゆうよねん

等にも百千万億倍すぎたる衆生の、觀經等の四十余年の

きようぎよう しょうじ 離 おも

經々によりて生死をはなれんと思は、はかなし、はか

によにん さいせ しょうぞうまつ そう いたさい しょぶつ いたさいきよう

なし。女人は在世・正像末、総じて一切の諸仏の一切經の

なか ほけきよう ほとけ 成

中に、法華經をはなれて仏になるべからず。

りようぜん ちようしゆ どうじようかいご てんだいちしやだいし さだ い

靈山の聴衆、道場開悟たる天台智者大師、定めて云わ

たきよう おとこ き おんな き こんきよう みな

く「他經は、ただ男にのみ記して女に記せず。今經は皆

き とううんぬん しやかによらい たほうぶつ じつぼうしよぶつ みまえ

記す」等云々。釈迦如来・多宝仏・十方諸仏の御前にして、

まかだい こくおうしやじよう うしとら わし やま もう ところ はちかねん

摩竭提国王舎城の良、鷲の山と申す所にて、八箇年の

あいだと たま ほけきよう ちしやだいし目 当 き

間説き給いし法華經を、智者大師まのあたり聞こしめしけ

われごじゆうよねん

いちだいしようぎよう

と置

みな

しゆじよう

るに、我五十余年の一代聖教を説きおくことは皆、衆生

りやく

なか

しじゆうにねん

きようぎよう

利益のためなり。ただし、その中に四十二年の経々には

によにん

ほとけ

成

と

いま

「女人、仏になるべからず」と説きたまいしなり。今、

ほけきよう

によにん

ほとけ

な

説

名乗

たま

法華経にして「女人、仏に成るととく」となのらせ給いし

ほとけ

めつごいつせんごひやくよねん

あ

わし

やま

とうほく

を、仏の滅後一千五百余年に当たつて、鷲の山より東北

じゆうまんはつせんり

さんかい

隔

まかしな

もう

くに

しんたん

十万八千里の山海をへだてて摩訶尸那と申す国あり、震旦

こく

くに

ほとけ

おんつか

い

たま

てんだい

国これなり。この国に仏の御使いに出でさせ給い、天台

ちしやだいし

名乗

によにん

ほけきよう

離

ほとけ

智者大師となのりて、「女人は法華経をはなれて仏になる

さだ

たま

べからず」と定めさせ給いぬ。

しなこく さんぜんり 隔 とうほう くに にほんこく 名

尸那国より二千里をへだてて東方に国あり、日本国とな

てんだいだいし ごにゆうめつにひやくよねん もう

づけたり。天台大師、御入滅二百余年と申せしに、この国に

でんぎようだいし 名乗 たま しゆうく もう しよ つく

生まれて伝教大師となのらせ給いて、秀句と申す書を造り

たま のうけ しよけ りやつこうな みようほうきようりき

給いしに、「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて

そくしんじようぶつ りゆうによ じようぶつ さだ お たま

即身成仏すと、竜女が成仏を定め置き給いたり。しか

とうせい によにん そくしんじようぶつ 難 おうじようごくらく

るに、当世の女人は即身成仏こそかたからめ、往生極楽は

ほっけ たの うたが たと こうが たいかい い

法華を憑まば疑いなし。譬えば、江河の大海に入るよりも

容 易 あめ そら お 速

たやすく、雨の空より落つるよりもはやくあるべきことな

り。

しかるに、日本国の一切の女人は、南無妙法蓮華経とは唱にほんこく いっさい によにん なんみょうほうれんげきょう とな

えずして、女人の往生・成仏をとげざる双観・観経等にによにん おうじよう じようぶつ 遂 そうかん かんぎようとう

よりて、弥陀の名号を一日に六万返・十万返などとなうみだ みようごう いちにち ろくまんべん じゅうまんべん 称

るは、仏の名号なれば巧みなるにはにたれども、女人ほとけ みようごう たく 似 によにん

不成仏・不往生の経によれる故に、いたずらに他の財を数ふじようぶつ ふおうじよう きよう ゆえ ほか たから かぞ

えたる女人なり。これひとえに悪知識にたばらかされたるによにん あくちしき 誑

なり。されば、日本国の一切の女人の御かたきは、虎狼よにほんこく いっさい によにん おん 敵 ころう

りも、山賊・海賊よりも、父母の敵・とわり等よりも、法華経さんぞく かいぞく ふぼ かたき 遊 女 とう ほけきよう

をばおしえずして念仏等をおしうるこそ、一切の女人の御教 ねんぶつとう 教 いっさい によにん おん

敵

かたきなれ。

なんみょうほうれんげきよう いちにち ろくまん じゅうまん せんまんとく とな のち

南無妙法蓮華経と一日に六万・十万・千万等も唱えて後

いとま ときどき みだとう しょぶつ みようごう くち

に、暇あらば時々弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみなる

もう たま ほけきよう しん によん

ように申し給わんこそ法華経を信ずる女人にてはあるべき

とうせい によん いちご あいだみだ みようごう

に、当世の女人は、一期の間弥陀の名号をばしきりにとな

ねんぶつ ぶつじ 隙 行 ほけきよう

え、念仏の仏事をばひまなくおこない、法華経をばつやつ

とな くよう ねんぶつしや ふほ きようだい ほけきよう じきようしや 読

や唱えず、供養せず。あるいはわずかに法華経を持経者によ

ねんぶつしや ふほ きようだい 思

ますれども、念仏者をば父母・兄弟なんどのようにおもい

じきようしや しょじゆう けんぞく 軽 思

なし、持経者をば所従・眷属よりもかるくおもえり。かく

ほけきよう しん よし 名乗

して、しかも法華經を信ずる由をなのるなり。そもそも

じようとくぶにん ににん たいし しゅつけ ゆる ほけきよう 弘

浄徳夫人は、二人の太子の出家を許して法華經をひろめさ

りゆうによ われ だいじよう おし ひら く しゅじよう どだつ

せ、竜女は、「我は大乗の教えを聞いて、苦の衆生を度脱

ちか まった たきよう ぎよう きよう

せん」とこそ誓いしが、全く他經ばかりを行じてこの經

ぎよう ちか いま によにん たきよう ぎよう

を行ぜじとは誓わず。今の女人はひとえに他經を行じて

ほけきよう ぎよう かた 知 疾 ころろ 翻

法華經を行ずる方をしらず。とくとく心をひるがえすべ

ころろ なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきよう

し、心をひるがえすべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

ぶんえいさんねんひのえとらしようがつむいか にちれん かおう

文永三年丙寅正月六日 日蓮 花押